

Role of autotransplantation in the treatment of acute promyelocytic leukemia patients in remission : Fukuoka BMT Group observations and a literature review

上村, 智彦

<https://doi.org/10.15017/1485073>

出版情報 : 九州大学, 2014, 博士 (医学), 論文博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (2)

(別紙様式2)

氏名	上村 智彦
論文名	Role of autotransplantation in the treatment of acute promyelocytic leukemia patients in remission: Fukuoka BMT Group observations and a literature review
論文調査委員	主査 九州大学 教授 谷 憲三朗 副査 九州大学 教授 松尾 恵太郎 副査 九州大学 教授 北園 孝成

論文審査の結果の要旨

申請者らは、1992年から2008年に第1寛解期 (1st complete remission, CR1) または第2寛解期 (CR2) の急性前骨髄球性白血病 (acute promyelocytic leukemia, APL) に対して、福岡血液移植グループ (Fukuoka Blood & Marrow Transplant Group, FBMTG) の7施設で、自家末梢血幹細胞移植 (autologous peripheral blood stem cell transplantation, auto-PBSCT) を施行された26例を後方視的に解析した。全例が *all-trans* retinoic acid (ATRA) を含む寛解導入療法を受けていた。CR1の20例は、2回の地固め療法後にauto-PBSCTを施行され、5例はWBC 10000/ μ l以上の高リスク群、15例はWBC 10000/ μ l未満の低リスクだった。CR2でauto-PBSCTを施行された6例は、初診時WBC 10000/ μ l未満の低リスクであったが、3回の地固め療法と2年間の維持療法後に再発し、再寛解導入療法と地固め療法により分子遺伝学的CRに到達した後、CR2でauto-PBSCTを施行された。26例における生着は速やかで、治療関連死亡は認められなかった。CR1でauto-PBSCTを施行された20例は移植後の観察期間中央値133ヶ月 (73-193ヶ月)、CR2でauto-PBSCTを施行された6例は観察期間中央値41ヶ月 (2-187ヶ月) で、維持療法を施行されずにCRを維持していた。PML/RAR α キメラmRNAは、auto-PBSCT前の末梢血幹細胞および骨髄から検出されなかった。少数例の検討ではあるが、申請者らの後方視的検討は、auto-PBSCTが高リスクAPL治療において、CRを長期間維持する有効な治療選択であることを示唆した。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。